

荒井猫田遺跡の発掘調査から *
Archaeological investigated report
of Arainekota ruins

高橋 博 志 **
By Hiroshi TAKAHASHI

要 旨

福島県郡山市安積町にある荒井猫田遺跡は、平成8年度の発掘調査で中世前期の道路跡や町屋が発見された。この時期の道路跡の調査例は、地方では例が少ない。ここでは、各調査区の調査結果の報告とともに、道路や町屋がどのような作られ方をしていたか、その盛衰はどういったものであったかを考えてみたい。

1. はじめに

荒井猫田遺跡は、福島県郡山市の中央部を南北に貫流する阿武隈川の西側河岸段丘上に存在する。周辺地域はすでに市街地化が進んでおり、遺跡の所在地は旧国鉄の貨物操車場であったために、遺跡の範囲確認が困難な地域でもあった。しかし、この地区に郡山南拠点土地区画整理事業が計画されたことにより、郡山市教育委員会は1995（平成7）年に試掘調査を実施した。その結果、44,800㎡の要保存範囲（Ⅰ～Ⅴ区）についての発掘調査を実施し、3ヵ年計画で遺跡の記録保存を行なうこととなった。第1年次である1996（平成8）年度の調査は、県産業交流館の建設予定地10,000㎡と仮設水路設置箇所450㎡（Ⅲ・Ⅳ区の一部）及び駐車場建設予定地（Ⅴ区の一部）が行なわれた。

2. 発掘調査の成果

（1）Ⅲ 区

a) 検出された遺構と遺物

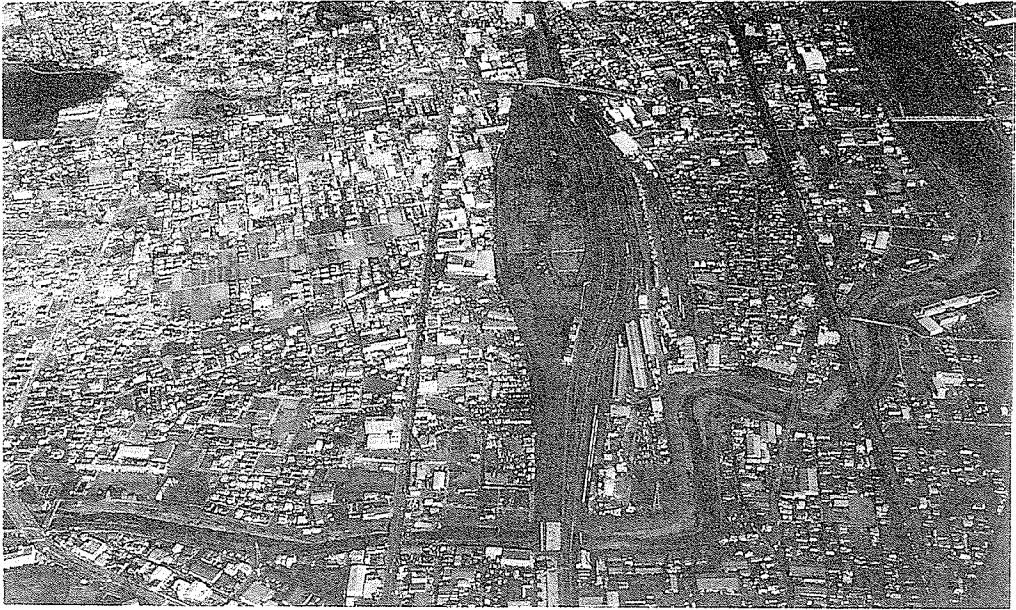
堀跡6条・溝跡51条・土坑564基（井戸跡200基を含む）・竪穴遺構4基・ピット（柱穴）9400基以上などが検出され、舶載品（青磁・白磁）・国産陶磁器（渥美 常滑 古瀬戸 在地産など）・土師質土器（かわらけ）・土師器・須恵器・木製品（曲物 箸 形代 井戸杵など）・石製品（砥石 石塔など）・鉄製品（刀子 釘 鍋など）・土製品（羽口）・鉄滓（碗型滓 流出滓）・古銭（北宋銭 南宋銭・元朝銭など）・獣骨・炭化米などが出土した。

b) 概 要

調査区の中央部を縦断するように、中世前期の道路跡が確認された。調査区南東隅から北北西の方向に北進し、屋敷の区画堀南西隅の西20m付近から北北東の方向へ向きを変えて、屋敷を区画する堀の西15mの所を平行して北進する。道幅は2～4mで両側に側溝があるが、カーブ地点から北では西側の側溝が屋敷跡の

* keywords : 中世前期（鎌倉時代） 道路跡 町屋

** 財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
（〒963 福島県郡山市本町1-20-22）



荒井猫田遺跡遠景（1996年11月 株式会社バスコ撮影）

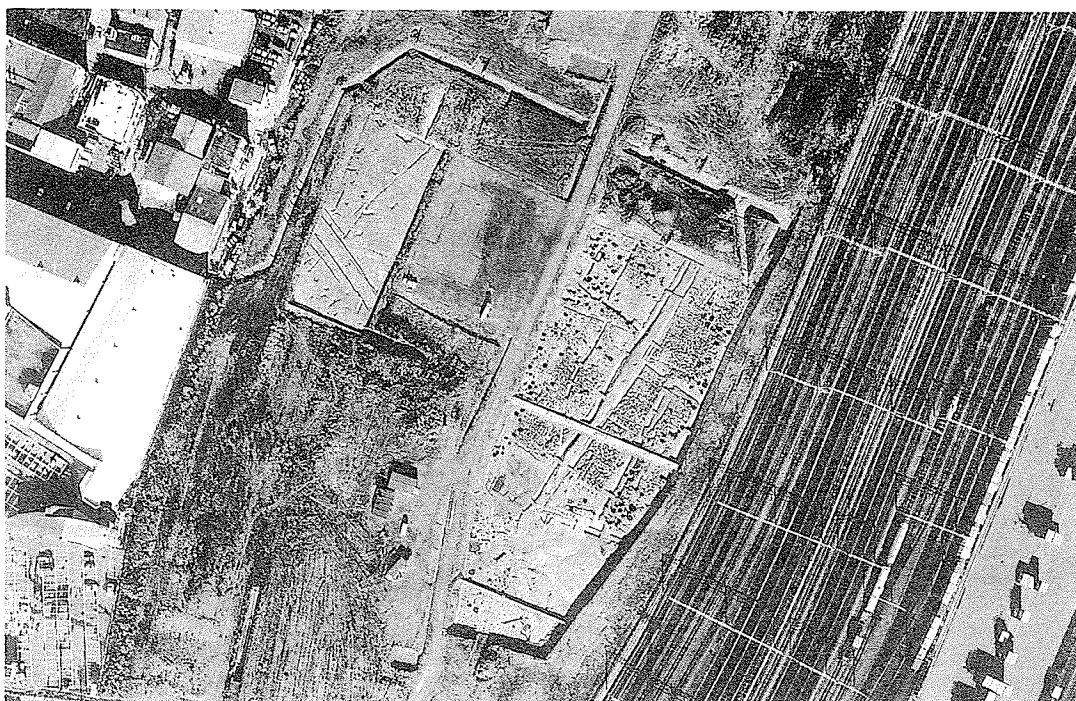
区画堀と同一の形態で、ほぼ同規模のものになる。側溝は少なくとも3回の改修が行なわれ、西側の側溝が屋敷の区画堀と同規模の深さ1.5m程度の築研堀となっているので、同一権力者によって意図的に改修したものと考えたい。また、側溝からの出土遺物が少ないことから、浚渫作業（メンテナンス）が行なわれていたと考えている。しかし、区画堀が比較的整然とした作りであることに対して、西側側溝の作りは蛇行しており、その様相を異にしている。作られた時期に違いがあることも、一考するものがある。そして、カーブ地点からは西進する道路跡が確認されており、後述するIV区で確認された道路跡へ続いていく。調査区内においては、敷石などの施設や踏み締まりなどは確認されなかった。

調査区東部の中央には築研堀によって区画された屋敷跡は、確認されている西辺の規模が外辺で一辺が約60mを測ることから、館（やかた）跡ではないかと考えられる。しかも、調査区東際にも同一規模の堀が確認されており、重複部分での新旧関係が見られないことから、最終的には同時期に存在したのものと考えられる。明治17年成立の丈量図からも、館の構造は複郭である。このことから、調査部分は西に張り出した部分のみで、館の中心部分はJR東日本の東北本線軌道敷下にある。しかし、区画堀よりも古い井戸跡が存在することから、張り出し部分は当初の単郭の館に付け加えたものと考えられる。また、西にある道路から屋敷内に入るための通路と土橋も確認されており、丈量図にもその形跡が窺われる。

柱穴群は屋敷跡と道路跡の両側、特に屋敷の北・西側に集中しており、町屋群を形成している。そして、地割りのためとも考えられる道路跡に直交する溝跡も発見されており、道路に面して比較的整然とした町屋群が想定できる。間口の幅については不明であるが、道路跡の西側20～25m付近に帯状に多数の井戸跡が分布し、この付近の柱穴の検出数が少ないことから、町屋の奥に井戸が営まれた景観が想定できる。試掘調査においてもこの西側では遺構の確認がされていないことから、帯状に分布する井戸跡群をもって町屋群は広がっていない。東側についても、試掘調査の結果から判断して、東北本線軌道敷までは町屋は広がっていない。よって、町屋部分は道路跡から両側25m程度の幅で構成されていたものと考えられ、町屋の構成を考える上で重要な成果である。

仮設水路部分の調査によって、道路跡はさらに北進することが確認された。また、町屋は北に広がっていくようであるが、柱穴の集中度は北になるにつれ希薄になっていくようである。

出土した陶磁器類は、中世前期（12世紀後半～15世紀前半）のものが大半を占めている。特に、常滑焼や



荒井猫田遺跡全景（1996年11月 株式会社パスコ撮影）



Ⅲ区道路跡断面図（筆者作図）



Ⅳ区道路跡断面図（筆者作図）



道路跡（1996年8月 筆者撮影）

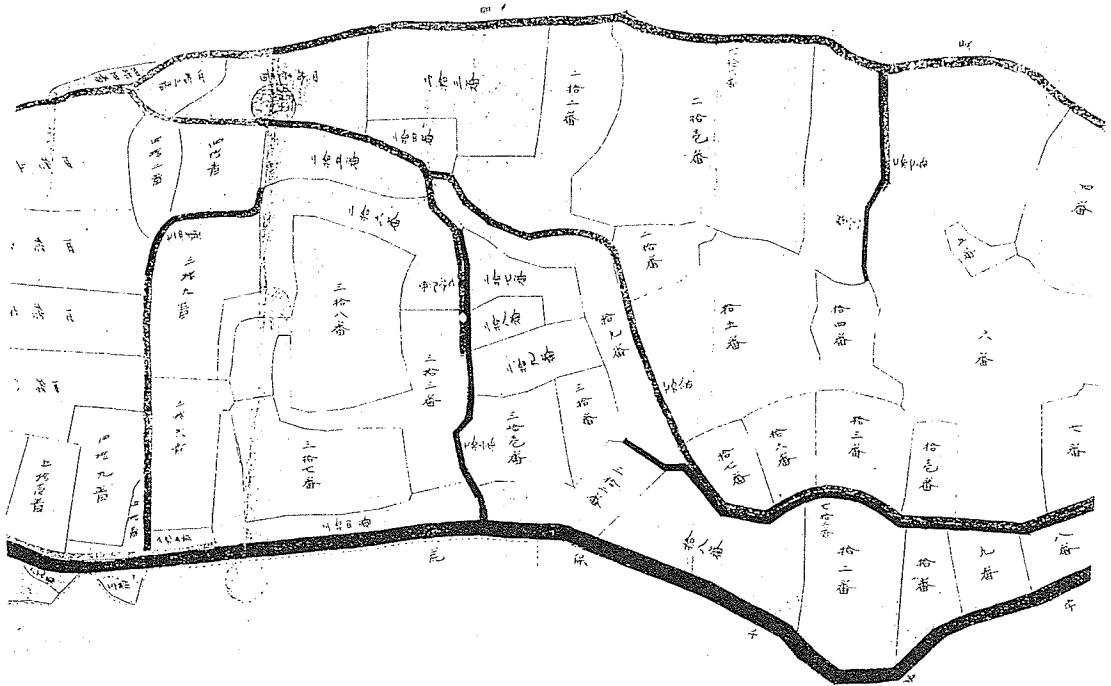


常滑焼系在産陶器の壺・甕類は多く出土しており、その生産年代は13世紀～14世紀後半代と考えられる。他の国産中世陶器は、渥美焼の壺や古瀬戸の碗・皿類が出土しているが、全体に占める割合は少ない。舶載品の青磁・白磁は13世紀～14世紀後半のもので、碗・皿類が主体となっている。かわらけの出土量は、陶磁器の出土量に比して極端に少ない。

（2）Ⅳ 区

a) 検出された遺構と遺物

堀跡1条・溝跡17条・土坑18基（井戸跡2基を含む）・ピット（柱穴）65基が検出され、舶載品（青磁）・国産陶器（常滑 在産）・古銭（北宋銭 南宋銭 元朝銭など）・獣骨などが発見された。



安積郡日出山十七番字北千保 丈量図抜粋（福島県文化センター 歴史資料館蔵）

b) 概 要

調査区南部で発見された平行する溝跡は、Ⅲ区で発見された道路跡のカーブ地点付近から分岐して西進する道路跡と考えられる。道幅は2～3mで、少なくとも1回以上の改修が行なわれているものと考えられる。

Ⅳ区西側の仮設水路部分を調査した結果、ピット群が確認されている。このことから、現在は市街地化されている西側方面に遺構群が存在するものと考えられる。しかし、Ⅲ区の町屋部分と比して遺構の密度は疎であり、町屋の存在は希薄なようである。

出土した陶磁器類は13～14世紀代のもので、Ⅲ区で出土したものと同年代のものである。

3. まとめ

荒井猫田遺跡の街並が成立したと考えられる中世前期の安積郡（現在の郡山市の阿武隈川西岸一帯）については、現存する文書資料が乏しいことから未解明なところが多い。安積郡は源頼朝による1189（文治5）年の奥州征伐の恩賞として伊豆国伊東荘の工藤祐経が賜った地域である。祐経は将軍に近侍しており、安積郡には代官が派遣されていたものとされている。その後、祐経の庶子である祐長が13世紀の初めには安積郡に下向して、領国経営を行なったものと考えられている。

荒井猫田は、安積伊東氏が入部した鎌倉時代の初期段階に幹線道路や街並が整備されていたことは確実である。整備された順序は、道路跡に他の遺構が重複しないことから幹線道路を整備した後に館を構え、その周囲に町屋群を作ったものと考えられる。さらに、西へ向かう道路の分岐点でもあることから、阿武隈川などの水運をも含めた交通の要所に位置する流通の拠点の町を意図して作られたものと考えたい。おそらくは、惣領領主の直接的な指揮の下に行なわれたものであろうが、新たに道路を整備し、集落や東山道を避けて計画的に作られたことが窺われることは、さらに上位者の政治的な意向を背景に行なわれたものとも考えてよからう。

しかし、館内からの出土遺物に領主の「ハレ」の場によく使われた「かわらけ」の出土量が非常に少ないことから、物流や交通を司る者の屋敷であった可能性もある。また、町屋部分からの出土遺物には生活観のある遺物よりも、物流に関わるものが多く出土している。在地産の壺・甕類に比べて常滑産のもの出土量が郡山市内における中世前期の遺跡からの出土量から比べて多いことは、それに貯蔵したものや壺・甕そのものを流通させたものであろう。また、出土遺物から鍛冶師や曲物師といった手工業に携わる職人たち、いわゆる「道々の輩」の存在が想定できる。さらに、職人達の住み分けを行っていたことが窺われることは、計画的な町づくりがされたことの傍証ともいえよう。こと住人に主眼を置けば、惣領やそれに従属するものたちの存在よりも、この町の物流経済に携わっていた町人（まちうど）ともいえる者たちが町屋を形成していたということであろう。

中世以前の荒井猫田遺跡は、道路跡より古い遺構（溝跡や竪穴住居跡）の存在や出土遺物に12世紀後半の渥美焼の壺があることから、平安時代後期には周辺に住人がいたことは確かである。集落の規模については今後の周辺地区の調査で明らかになっていくことであろうが、おそらくは集落の縁辺部に当たるのではなかろうか。古代の集落については当地域においても多くの遺跡で調査されているが、道路については調査例がなく未解明である。古代の官道である東山道は阿武隈川の西岸を通っていたとされているが、その位置については明らかになっていない。東山道の調査例は関東地方に見受けられるが、最近公表された栃木県宇都宮市にある杉村遺跡の道幅は、8世紀前半で約10～14m、8世紀後半で約15m、9世紀で約6mであるという。また、12世紀代に繁栄した奥州藤原氏の本拠地である岩手県平泉町の柳ノ御所を中心とする遺跡群でも、道路跡が調査されている。ここでの道幅は4～8m（本澤慎輔氏の御教示による）で、荒井猫田のものよりは広いようである。藤原清衡は白河関から外ヶ浜（青森県）まで至る街道に、一丁ごとに皆金色の笠卒塔婆を置いたと伝えられている（『吾妻鏡』による）。このことから、当地域でも幹線道路の整備はなされていたものと思われるが、詳細は不明である。道幅から考えて、中世前期の荒井猫田の道路跡は古代の東山道を踏襲しているとは考えられず、古代からの集落とも連続性がない。しかし、12世紀段階での道路整備については検討の余地があると思われる。

鎌倉時代にピークに達した荒井猫田は、その終焉とともに衰退したようで、15世紀後半以降の中世の遺物は出土していない。焼失した形跡はなく、政治的理由などにより平和裡に町ごとに移転したと考えたい。このことは、応永六年（1399年）に鎌倉公方の命により奥州支配のために下向した足利満直（鎌倉公方足利満兼の弟）の居所であった篠川御所（荒井猫田の南2kmにある）など、政治的な背景も考える必要があろう。中世後期の荒井猫田は調査結果からみて、日常生活の場であったとは考え難い。明治17年成立の丈量図からも推定できるように、江戸時代の荒井猫田は水田などの農地であるが、中世前期の様相を残し続けている。つまり、中世後期においては何も手が加わっていないということで、町が衰退した後は安積郡の一農村となっていたと考えてよいのではなかろうか。幹線道路についていえば、近世の奥州街道はさらに東の旧国道4号線である。しかし、前述した丈量図からも荒井猫田の道路は、農村の田舎道としてではあるが残っていたようである。村落間を結ぶ道として、残されていたのであろう。

現在も郡山市は、経済・流通の拠点である。遠き鎌倉時代において郡山市の原型ともとらえられる街並があったことを、今回の調査で現出させることができた。荒井猫田のような幹線道路と町屋がセットになった遺跡は、非常に少ない。道路の行く先については不明であるが、鎌倉や平泉といった政治的な拠点と対比しながら、地方における交通・物流の拠点としての在り方を解明していく上での端緒になる調査でもあった。しかし、広大な遺跡の一部のみの調査における見解であること、また今後の検討によっては見解が変わることがあることをここにお断わりしておきたい。今後の調査では、隣接する西・北に調査区が広がる。さらに多くのことが発見され、新たなことが解明されていくことを期待したい。

最後になりましたが、飯村均、岡洋一郎、小野正敏、河野眞知郎、齋木秀雄、高橋圭次、中山雅弘、平田 稜文、広長秀典、藤原良章、本澤慎輔、八重樫忠郎（五十音順）の各氏をはじめとする多くの方々や財団法人

人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団、郡山市教育委員会文化課の職員諸氏には調査中より多大なる御指導・御助言をいただいたことには、深く感謝申し上げます。また、本稿を掲載していただく機会をご紹介くださいました藤田龍之先生には御礼申し上げます。

(本稿は1997年2月末日に脱稿した「史学雑誌」掲載予定の原稿を一部加筆修正したものである)

参考文献

小林清二ほか 『「歴史の道」調査報告書 奥州道中 白坂境明神一貝田』 福島県教育委員会 1983年3月

小林清二ほか 『郡山市史1 原始 古代 中世』 福島県郡山市教育委員会 1975年2月

中島雄一 「車窓からみえる堀(荒井猫田遺跡)」『郡山埋文ニュース』第111号

(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1996年8月

高橋博志 「中世の街並みを探る(荒井猫田遺跡 Vol.2)」『郡山埋文ニュース』第113号

(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1996年10月